

「コミュニクアジア 2016」

神谷 直亮

前述「ブロードキャストアジア 2016 (以下、BA2016)」の併催イベントとして「コミュニクアジア 2016 (以下、CA2016)」が、マリーナ・ベイ・サンズ・コンベンション・センター (以下、サンズ) の 1 階と 3 階を使って行われた。「BA2016」の主役は、日本の放送機器メーカーであったが、「CA2016」の展示会場には、世界の衛星通信・衛星放送事業者が 19 社集結して、各社特有の戦略と最新鋭のシステムを披露した。

中でもウルトラ HD (4K) 戦略に注力しているミアサット、アジアサット、スカイパーフェクト JSAT、ユーテルサット、SES の 5 社による競演が目撃された。

マレーシアから出展したミアサット社

は、すでにアジア広域に配信を始めている「ファッション TV 4K」「インサイト 4K」の再生デモに加えて、4K HDR (ハイダイナミックレンジ) の特別デモを実施していた。この特別デモに協賛したのは、ATEME (HEVC エンコーダ)、BBright (プレイアウト)、MStar (STB)、Newtec (モデム)、ソニー (75 型 4K HDR テレビ) の 5 社である。ブースの担当者によれば、「クアラルンプール郊外にあるサイバージャヤ放送センターからミアサット 3a 衛星にアップリンクし、サンズの屋上に設置した直径 3m のアンテナで受信している」とのことであった。HDR のフォーマットを聞いてみたら「ドルビービジョンの PQ」と答えていた。上映されたコンテンツは、Clubbing TV が制作したライブ音楽番組と

United TV のスポーツイベントのハイライトである。欧米と日本が本格的に取り組み始めている HDR 市場に、早々とマレーシアの事業者が参入を試みていたのは、今回の最もうれしい発見であった。

ミアサットのすぐ隣にブースを構えたスカイパーフェクト JSAT は、総務省が発表した 4K8K ロードマップで日本の全体像を示したうえで、5 月 1 日に開局したばかりの「4K 体験」のコンテンツを公開した。サッカーのスローモーション高精細映像が繰り返し再生され、見入っている来場者が多かった。興味深かったのは、この 4K スローモーション映像の方が、ミアサットの 4K HDR 映像より人気を得ていた。

香港に本社を構えるアジアサット社は、すでにアジアサット 4 衛星で配信を始めている「4K Sat」と新しく開局したばかりの「4K Sat-2」のデモを実施した。「4K Sat」の目玉番組は、「Fashion TV 4K」「Love Nature」で、「4K Sat-2」は、ホームロケットがアメリカで提供を始めた「NASA TV 4K」の専門チャンネルだ。

フランスを本拠とするユーテルサット社は、大手企業の PR 用に制作した一風変わった 4K コンテンツを紹介していた。社名は公表されなかったが、自動車メーカーや衛星メーカーの工場の生産ラインや仕上がった製品の高精細映像とその詳しい説明が中心であった。放送以外の 4K ビジネスに活路を見出そうという試みと思われた。

ルクセンブルグを拠点にして世界展開を行っている SES 社は、コマーシャルベースとデモベースを合わせて、すでに 24 チャンネルの配信を請け負っており、今回、これらの 4K コンテンツのハイライトを次々に披露した。最新のコンテンツを確認したら「ボディペインティング」「スケートボード」「バレー」「武術」を挙げていた。どぎつい色のペイントを女性のボディに塗りま



写真1 マレーシアのミアサット社は、すでにアジア広域に配信している 2 チャンネル 4K コンテンツの再生デモを実施した。



写真2 ミアサット社は、さらに 4K HDR コンテンツの衛星中継を実現して来場者の注目を集めた。



写真3 スカイパーフェクト JSAT は、「4K 体験」で放送しているサッカーのスローモーション映像を再生して来場者を魅了した。



写真4 アジアサット社は、「4K Sat」プラットフォームで配信中の「Fashion TV 4K」目玉にしていた。

くる「ボディペインティング」と、動きの極めて速い「スケートボード」の2本が非常に印象的であった。

既述の5社以外に今回、ブースを構えたのは、インテルサット、KTSat、アジア放送衛星 (ABS)、チャイナサット、APT サテライト、タイコム、Gazprom、インマルサット、シングテル、グローバルスター、O3b ネットワークス、ロシア衛星通信 (RSCC) イリジウム、スラーヤの14社である。

インテルサットは、ブースのモニターで同社が配信している「NHK ワールド」「BBC ワールド」の番組を紹介する傍ら、超高速大容量衛星 (EPIC)、小型低軌道周回衛星 (OneWeb)、平面アンテナのPRに余念がなかった。EPIC シリーズの第1号衛星となった「インテルサット29e」については、「リオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピックの映像伝送に最適」と売り込んでいた。出資先のカイメタ社が鋭意開発中で、期待が大いに高まっている平面アンテナについては、ホログラムを駆使した変わったプレゼンテーションを行って来場者の注目を集めた。

韓国のKTSat社は、東経113度で「コリアサット5」、116度で「同6」、75度で「同8」の3機の衛星を運用中である。ブースで確認したところ、後継機として「コリアサット5A」と「同7」を、フランスのタレス・アレニア・スペース社で製作中とのことであった。注力しているアプリケーションを聞いてみたところ「KTスカイライフの4K放送と船舶・航空機向けの移動体通信」と答えていた。

ABS社は、昨年3月に西経3度に打ち上げたABS-3A衛星の売込みに躍りになっていた。ヨーロッパ、中東、アフリカをカバーするKuバンドビームとアフリカ、南米をカバーするCバンドビームを搭載しており、中継器の数は48台と語っていた。4K放

送への取り組みを聞いてみたら「まだ尚早と判断している」との回答であった。

中国のチャイナサット社は、すでに運用中の4機の衛星に加えて、2017年に打ち上げを予定している「チャイナサット9A」「同16」「同17」のPRを展開した。特に注目されるのは、中国初のKaバンド衛星となる「チャイナサット16」と言える。まだ、手の内を公開していないが、アメリカで普及しているパイアサット衛星やジュピター衛星に類似したブロードバンド・インターネット・サービスを始めるのではないかとと思われる。

香港を拠点とする中国系のAPTサテライト社は、自社の5機の衛星の他に「ラオスが打ち上げたラオサット衛星のトラポン販売を支援している」と、意表を突く発言をしていた。「APStar-L」という名称がついていたこの衛星は、中国で製作され、昨年10月に長征ロケットで打ち上げられたばかりである。中国、ラオス両政府に頼まれて、支援を断れなかったものと思われる。

タイのタイコム社は、会期直前の5月28日に待望の「タイコム8」衛星を打ち上げたばかりで、ブースはお祝いムードであった。この衛星は、アメリカのオービタルATK社で製作され、搭載されている24台のKuバンド中継器は、主に自国の衛星放送とインドの衛星放送用に提供されるとのことであった。

Gazprom社のブースでは、同社の「Yamal-401」衛星を使って4Kの伝送試験を実施したという面白い話を聞くことができた。この伝送には、NECが開発した「VC-8150」HEVCエンコーダと「VD-8100」デコーダが使用され、コンテンツはロシア公共放送が提供したという。ロシアでは、すでにユーテルサット衛星によるトライカラー社の4K放送が始まっており、Gazpromも真剣になってビジネスプラン

を練っているようである。

インマルサット社は、同社の第5世代衛星の売込みと共に、従来のLバンドを使う新しいサービスとして、UHFをLバンドに変換してインマルサット衛星経由で目的地に伝送し、ここでLバンドからUHFに戻して通信を実現するというデモを行っていた。狙いは、「遠隔地のトランシーバー間の簡易なコミュニケーションの実現」とのことであった。

グローバルスター社は、「SPOT GEN3」と名付けた端末を展示して、「携帯電話不感地帯に入り込んだ際の人命救助の手助けになる」との説明を行っていた。よく見ると端末に5つのボタンが付いており、このうちの1つがS.O.S. ボタンと表示してある。絶体絶命の状態に陥った時にこれを押すと、GPSによるロケーション情報がグローバルスター衛星経由で救命本部に伝わる仕組みになっていた。

O3b ネットワークスは、赤道上空の中軌道に12機のKaバンド周回衛星を打ち上げてブロードバンドサービスを提供している。今回、ブースの担当者は、「さらに追加の8機をフランスのタレス・アレニア・スペースで製作中である。打ち上げは、2017年から始めて、待望の20機体制にする」と語っていた。Kaバンド衛星なので降雨減衰について聞いてみたら「直径4.5mのアンテナで追尾する条件で、99.7%の運用実績となっている」と答えていた。

地元シンガポールのシングテルは、同社のST衛星を駆使する海上ブロードバンドサービスを売込みに余念がなかった。同国は、衛星放送の個別受信を認めていないので、移動体衛星通信に活路を見出しているようであった。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディアジャーナリスト